

新年のご挨拶

スピード感を持って、各種事業を展開



高松商工会議所 会頭
竹崎 克彦

平成23年の新春を迎えるにあたり、謹んでお慶びを申し上げます。

緩やかな回復を続けておりました我が国経済は、昨年後半から海外経済の減速や、円高の長期化による輸出の鈍化などに加え、各種経済対策効果の剥落による個人消費の落ち込みなどもあり、停滞感を抱えたまま新年を迎えることとなりました。地域や企業間の格差はさらに拡がり、地域経済や中小企業に深刻な影響を及ぼしております。

地域経済の発展は、中小企業の活力とその成長なくしてはあり得ません。財政の出勤による景気回復に大きく期待することが出来ない現在、関係者が相互に連携をとりながら、それぞれの立場で知恵を出し、汗をかくこと

によって実現するしかありません。

このような中、当所は昨年2月に創立130周年の記念すべき節目を迎え、会員皆様方のご支援によりまして、様々な事業を展開いたしました。

昨年は、「第2回高松国際ピアノコンクール」、「船の祭典2010」、「瀬戸内国際芸術祭2010」などのイベントが開催され、内外の来賓者から高い評価を受けました。本年11月には「第11回アジア太平洋盆栽水石大会」が開催されますほか、各種のイベントや諸会議が開催されますが、皆様方にも積極的にご参加いただき、賑わい創りと地域の活性化にご協力賜りますようお願い申し上げます。

また、丸亀町商店街ではA・B・C街区が順次整備され、中心市街地の活性化に大きな役割を果たしており、引き続き商業施設やレストラン、マンションなどで構成されるG街区の完成が待たれるところであります。

このような状況を踏まえ、当所といたしましては、平成20年に策定した「行動計画」を見直し、本年4月から向こう3年間の取り組みむべき「新行動計画」を策定することとして

おります。会員や地域の皆様方のご意見やご要望をお伺いし、グローバル化への対応などをはじめ、当面の諸課題に対して関係各方面とも連携をとりながら積極的に、かつスピード感を持って取り組み、地域商工業の振興発展と地域の活性化に努めてまいりたいと存じます。

本年も高松商工会議所の活動に一層のご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。まして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

互いが**育**むまち、 **成**熟し続けるまち



高松丸亀町商店街G街区
市街地再開発組合 植村博 理事長

高松丸亀町商店街のG街区再開発事業は、
この1月17日に起工式を行い、平成24年3月末には、
新しい街として生まれかわる。
植村理事長に新しい街づくりへの思いを聞いた。

商業の街、高松

高松は「商業の街」といわれている。現在は大型店の激戦地であるため、中央商店街では住む人も通行量も減少し、空洞化した商業地となりつつある。もう一度、中央商店街に住む人、買い物客などをとり戻したい。今、進めている再開発は商業施設の開発だが、ただそれだけではなく、「商業の街」としての力をあげることが、都市の力をあげることにつながると思っている。高松市をどうするかという根幹の部分であると思う。

中心市街地の骨格として

現在、商店街では、A街区と三越が北部の賑わいの核となっており、南部は天満屋とその周辺商店街が核となっている。しかし、それぞれの核が、約1kmも離れているため、十分な相乗効果が期待できない状況にある。その中央に位置するG街区の整備により、歩行者の回遊動線が生まれ、サンポート、三越・A街区、G街区、天満屋・周辺商店街という中心市街地（まち）の骨格ができる。「まち」の骨格ができることで、中央商店街全体として商業環境やまちなみが創出され、人が集まり、行き交うことで、活性化が十分期待できる。

人が集う広場

買い物だけでなく、この街で楽しんでもらうために、1階に約200坪の広場や

オープンカフェなどを設けている。広場では特産品の販売やイベントも行うので、ゆとり過ぎしてほしい。また、4階にはオープンテラスのレストランと共に、屋上庭園を設けた。昼休みにはお弁当を食べたり、休憩したりと街を訪れる人の憩いの場として使ってもらいたい。



1階 エコゾーガーデン



4階 屋上庭園

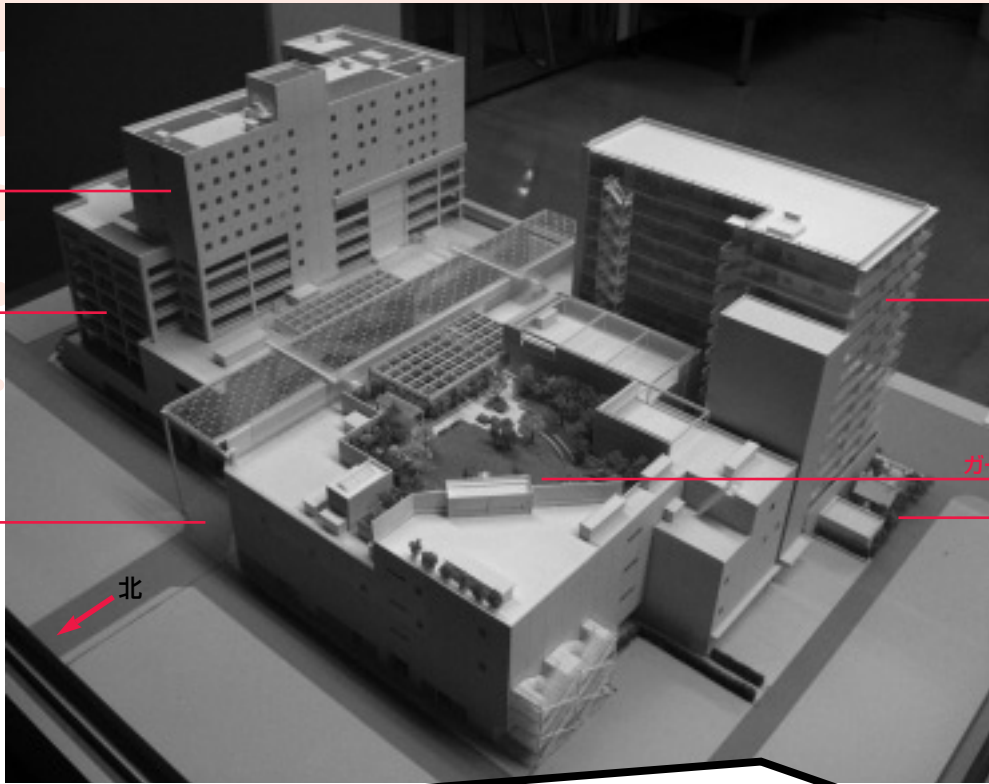
街を楽しむ

G街区では、飲食のテナントが多いことが特徴である。また、ここに住む人たちが、徒歩圏内で生活するための生鮮食品の店は、市場のような対面販売でコミュニケーションを図るスタイルを考えている。G街区は単なる商業施設ではなく、生活する場もある。そこに住む人、訪れる人に街を楽しんでもらうことが、街づくりの成功に繋がると思っている。

ホテル

自走式
立体駐車場

商店街通路



マンション

4階
ガーデンレストラン

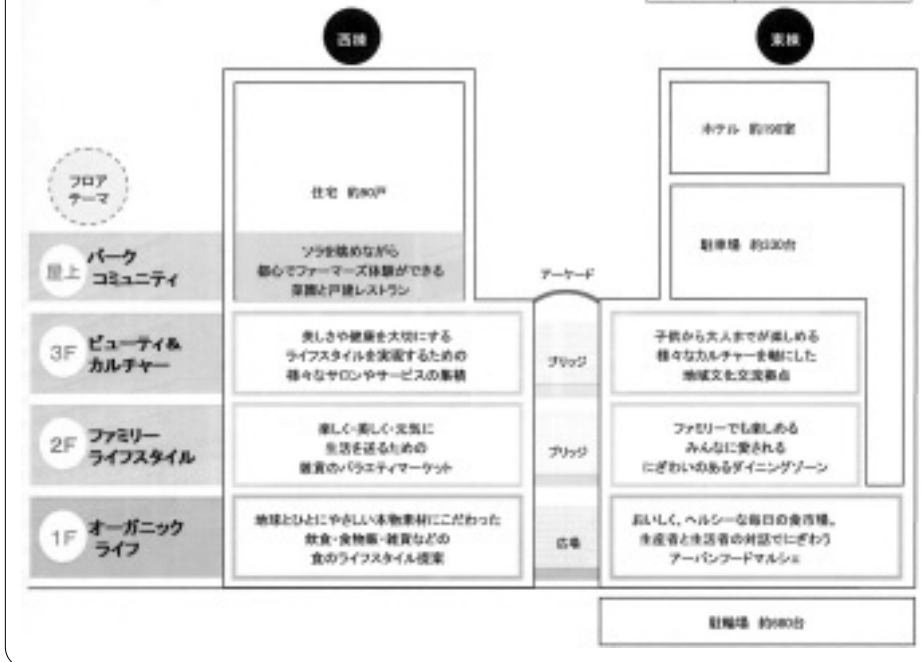
亀井戸水神社

高松丸亀町 G 街区

パティカルプラン

■計画概要(予定)

建築敷地面積	約81,000㎡	工業用途	事務所、倉庫
建築面積	約1,000㎡	商業	約9,900㎡
建築延床面積	約44,000㎡	住宅	約8,000㎡(約80戸)
		ホテル	約6,300㎡(約190室)
		駐車場	約330台
		駐輪場	約80台



育むまち、G街区

G街区は「育むまち」をコンセプトとしている。人を街なかに戻すために、居住環境を整備してきた。商業施設の完成⇨出来あがりではなく、G街区をこういいう街にしたいという思いを来街者が受け、来街者の思いを街に反映することで、お互いが育みあい、いい街にしていきたい。

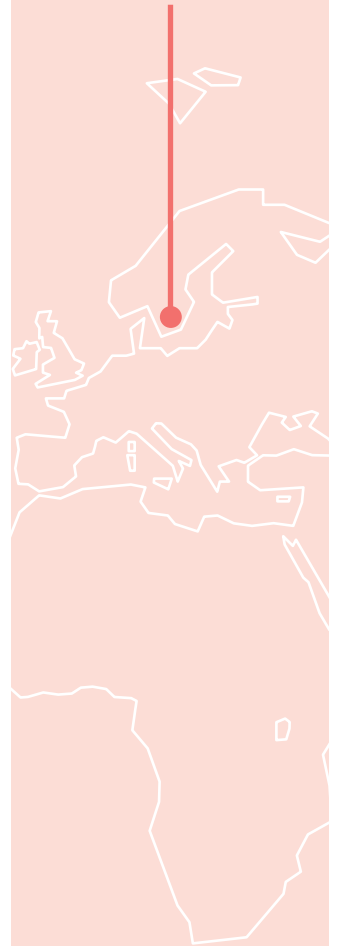


フィンランドにおける日本語



フィンランド：ヘルシンキ在住
ヘルシンキ大学日本語講師

植村 友香子 氏



高松市出身。
1993年よりヘルシンキ。

来年の話をすると鬼が笑うというが、では去年の話をすると鬼を泣かせてしまうだろうか。そこをあえて去年の話、つまり2010年10月26日から29日にかけてヘルシンキ大学で開催された『フィンランドにおける日本語』セミナーに関連した話をしたい。このセミナーのくわしい内容についてはホームページ www.helsinki.fi/jasu をご覧いただくことにして、セミナーの主要なテーマであったフィンランドの外国語教育という観点から綴って

みたい。

ある調査によると、フィンランドの子供の約30%は日本のポップカルチャーに「非常に」または「ある程度」興味を持っておりと回答しているそうで、日本語は若い世代のフィンランド人にとっては、漫画やアニメを通じて日常親しむ言語になっている。ヘルシンキ地域では日本語を教えている高校などもそこそこあるのだが、正規のカリキュラムにはなっていないため教え方もバラバラで、大学に入学してきて「もう日本語はある程度勉強したから、初級はできません」と自信たっぷりと言う学生が、日付をろくに言えなかったり、ひらがなをきちんと書けなかったりする。せめて日本語を高校で学習する選択外国語の一つにすることはできないものだろうか。

今、フィンランド教育界が問題視していることは、この10年間で、義務教育期間に英語以外の外国語を学習する生徒が激減しているということだ。学校で教えられる外

国語はどの学年で学習するかによってA、Bのグループに分けられている。小学校で学習を開始するのがA外国語、中学校で開始するのがB外国語。第一外国語は小学校3年で勉強し始めるのが標準だが、学校によっては1年生から始めるところもあり、そのほとんどが英語である。かつては中学校で第二、第三外国語を勉強する生徒が40%ほどいたのが、今では20%以下に減ってしまった。

世界のグローバル化に逆行するようなこの傾向に、フィンランドの企業をまとめる「フィンランド産業中央組合」も懸念を表明している。海外に進出した場合、現地の文化を知ることなくビジネスを進めることはできず、それには英語だけでは不十分、小国フィンランドが生き残っていくためには多様な外国語能力が不可欠だという認識である。

フィンランドの外国語教育の議論をややこしいものになっているのは、「国語」がフ



インランド語とスウェーデン語の二つあって、中学に入ったらフィンランド語が母語の生徒はスウェーデン語を勉強させられるという事情である。この二つの言語は日本語と中国語くらい違っている。いやいや勉強させられる外国語が身につかないというのは、日本の英語教育を体験した方ならお分かりだろう。

多様な外国語学習を推進するためにはこの「スウェーデン語」を必修からはずして、その分、ほかの外国語を教えられるようにするべきだという意見があるが、それに対してはスウェーデン語を母語とする人たちなどからの強い反発があり、なかなか話が前に進まない。この二つの「国語」の間には、歴史的な事情や感情的な面などで、なかなか複雑な事情があるようなのだ。

さて、こういう中での日本語教育。フィンランドの若者をとりにまく日本語環境が大きく変わり、彼らの日本語知識がかつてとは比較にならないほどに増えたとはいえ、中上級レベルの日本語を教えているのはヘルシンキ大学ぐらいのものである。そしてそこでも、基本的なカリキュラムは20年前と変っていない。

セミナー1日目の講演者の一人、教育文化省のアニタ・レヒコイネ氏は「ヘルシンキ大学は、日本語のような非ヨーロッパ言語の教育を担うという国民的責任を負っ

ています」とおっしゃっていたのだが、だつたらなあ、もっと予算つけてください、とつぶやきたい気分である。

ただし、いくら条件が悪くても、やる気があればかなりのことができる、というのも事実だ。セミナー2日目はヘルシンキ大学で日本研究を専攻する修士レベルの学生たちの発表だったが、あらかじめ用意した発表だけでなく、質疑応答も落ち着いて見事に日本語でこなした彼らの姿に、聞きに来ていた方々からは賞賛の声を聞いた。彼らこそがまさしく、フィンランドにおける日本語の将来である。



セミナーで講演する
教育省のアニタ・レ
ヒコイネ氏



ヘルシンキ大学ユッカ・コラ副学長。
手にしているのは今回のセミナーに併せて
出版された『フィンランドにおける日本語』
インタビュー集。



セミナー・パネルディスカッションの
パネリストたち。
この人たちはヘルシンキ大学で日本語
を学び、外交官、音楽家、研究者として
活躍中。